松江の吉田くん
（松江市）

しろまるひめ
（姫路市）

ひこにゃん
（彦根市）

わん丸君
（犬山市）

アルプちゃん
（松本市）

発行・お問い合わせ
国宝城郭都市観光協議会

□ 松江市観光部観光振興課
〒690-8540　島根県松江市末次町86番地 TEL.0852-55-5214／FAX.0852-55-5634
URL：https://www.city.matsue.lg.jp　E-mail：kankou@city.matsue.lg.jp

□ 姫路市観光文化部観光課
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地　TEL.079-221-1500／FAX.079-221-1527
URL：https://www.city.himeji.lg.jp　E-mail：kankokouryu@city.himeji.lg.jp

□ 彦根市観光文化戦略部観光交流課
〒522-8501　滋賀県彦根市元町4番2号　TEL.0749-30-6120／FAX.0749-24-9676
URL：https://www.city.hikone.lg.jp/　E-mail：kanko@ma.city.hikone.shiga.jp

□ 犬山市経済環境部観光課
〒484-8501　愛知県犬山市大字犬山字東畑36番地　TEL.0568-44-0342／FAX.0568-44-0367
URL：https://www.city.inuyama.aichi.jp/　E-mail：040500@city.inuyama.lg.jp

□ 松本市文化観光部観光プロモーション課
〒390-0874　長野県松本市大手3丁目8番13号　TEL.0263-34-8307／FAX.0263-34-3049
URL：https://www.city.matsumoto.nagano.jp/　E-mail：kankou@city.matsumoto.lg.jp

ホームページ：https://kokuho-gojo.com/
Instagram：@kokuho_gojo.official

記載情報：令和5年12月現在

国宝五城への旅

The Five Castles Designated
as National Treasures

城が現代に伝えるもの

国宝五城への旅

一国一城の主となること—それは戦国乱世を生きる武将の夢であった。「城」は権力の象徴であり、領地経営の要となった。そして、その陰には想像を絶する人々の労力と、知恵や技が集結されていた。

「国宝松江城」「世界文化遺産・国宝姫路城」「国宝彦根城」「国宝犬山城」「国宝松本城」は、現存する数少ない城の中でも、文化的価値が極めて高い城である。そこには、卓越した建築技術や美的完成度の高さ等が集約されている。また、江戸時代に花開いた大名文化をはじめ、長い時の流れの中で育まれてきた町衆文化も色濃く残されている。そして、今も人と人との交流等が促進される中で触発された新たな文化も生まれている。

国宝五城への旅は、古さと新しさが巧く調和した「城下町文化」に触れ親しむとともに、現代を見つめ直す旅なのかもしれない……。

室町時代

貞和	二年	一三四六 赤松貞範、姫山に城を築く（後の姫路城）
応仁	元年	一四六七 応仁の乱
永正	元年	一五〇四 深志城（後の松本城）築城
天文	六年	一五三七 **犬山城築城**
	十二年	一五四三 ポルトガル船が種子島に漂流し鉄砲を伝える。
	十八年	一五四九 ザビエル鹿児島に上陸、キリスト教伝来。
永禄	三年	一五六〇 桶狭間の戦。信長、今川義元を破る。
天正	三年	一五七五 長篠の戦。織田・徳川連合軍、武田軍を破る。
	四年	一五七六 信長、安土城を築く
	八年	一五八〇 秀吉が姫路城の基礎築城
	十年	一五八二 本能寺の変
	十一年	一五八三 賤ヶ岳の戦い。秀吉、柴田勝家を破る。
	十二年	一五八四 小牧・長久手の戦。秀吉、家康和睦。
	十三年	一五八五 秀吉、関白となる。

安土桃山時代

文禄	二年	一五九三 **松本城築城（着手）**
	三年	一五九四 **松本城完成**
慶長	五年	一六〇〇 関ヶ原の合戦
	六年	一六〇一 **姫路城築城（着手）**
	八年	一六〇三 江戸幕府誕生
	九年	一六〇四 **彦根城築城（着手）**
	十二年	一六〇七 **松江城築城（着手）**
	十四年	一六〇九 **姫路城完成**
	十六年	一六一一 **松江城完成**
	十九年	一六一四 大坂冬の陣
		大坂夏の陣、豊臣氏滅亡

江戸時代

元和	元年	一六一五 **彦根城完成**
寛永	八年	一六三一 鎖国令
	十年	一六三三 島原の乱
	十四年	一六三七 桜田門外の変。井伊直弼暗殺される。
万永	元年	一八六〇 大政奉還
慶応	三年	一八六七 明治維新始まる。廃城令公布。
	四年	一八六八

築城年：江戸時代／慶長16年（1611年）
築城者：堀尾忠晴
所在地：島根県松江市
形　状：平山城

松江城

Matsue Castle

富田城（中世山城）から松江城（近世平山城）へ、城郭文化の進展をあらわす

松江城天守の古材から発見された堀尾氏の家紋である分銅紋に富の字が記された刻印は、出雲に入国した堀尾氏が当初居城とした富田城の部材であることを示している。松江城天守の下層部はこうした富田城の部材が転用されており、我が国の城郭文化の進展とその様態を具体的にあらわす貴重な文化遺産である。

築城ストーリー

堀尾氏の出雲入国

堀尾吉晴は豊臣政権の三中老の一人として徳川家康など五大老と石田三成など五奉行との間を調整していたが、豊臣秀吉の没後は家康派と三成派の関係は抜き差しならぬ状況となった。

慶長4年（1599）徳川家康は加賀の前田利長、佐和山城の石田三成の動静を探るため堀尾吉晴に遠江浜松12万石の家督を嫡子忠氏に譲らせ、越前府中に隠居料として5万石を与えた。吉晴は家康の上杉征伐に際し、会津への従軍を申し出るため浜松で会ったが、その帰りに池鯉鮒（ちりゅう）で深手を負い関ヶ原には忠氏のみが出陣した※1。

関ヶ原の合戦の軍功によって堀尾忠氏は隠居の吉晴とともに24万石に加増され出雲・隠岐2国の領主として、かつて中国11か国を領有した尼子氏が居城とした富田城に入城した。

富田から松江へ

関ヶ原の合戦の時点では富田城は吉川広家が居城としていた。富田城は山城としては比類なき名城であったが城下町の広さ、物資の流通など吉川氏は近世城郭としての限界を感じ、隣の伯耆に米子城を築城し始めていた。

吉晴、忠氏親子も富田城が出雲の国の東に寄り過ぎていることと、吉川氏と同じ限界を感じ城下を発展させる必要から松江に築城する事とした。宍道湖東岸の元山（床几山）から宍道湖、大橋川の北岸平野部を俯瞰し、築城の候補地として吉晴は毛利元就が富田城攻めの前線基地とした洗合山（あらわいやま）を適地と考えたが、忠氏は洗合山では山塊が広大過ぎ24万石の大名には維持が困難だとして尼子氏の支城があったとされる亀田山（かめだやま）を主張した。

慶長9年（1604）、忠氏が急逝してこの論争に決着がついた。忠氏の嫡子三之助（忠晴）はまだ6歳と幼く、吉晴は忠氏の遺志を尊重して亀田山に松江城を築城することになった。吉晴は豊臣秀吉が木下藤吉郎と名乗っていた頃からの家臣で秀吉の合戦に殆ど従軍し、三木城、鳥取城、備中高松城攻めでは検死役を務めた。浜松城をはじめ、各地の城の築城に関わり、加藤清正と並ぶ城普請の名人といわれていた。慶長12年（1607）から築城を開始し、天守は慶長16年（1611）に完成した。

親藩松江藩の成立

堀尾氏は寛永10年（1633）忠晴が没すると世継ぎなく断絶した。その後は、京極忠高が26万4千石で若狭小浜から入府したが忠高が3年で没した為、寛永15年（1638）に松平直政が信濃松本から18万6千石で転封し、以後10代定安まで松平氏が松江藩を治め明治を迎えた。この間、7代治郷（不昧）は江戸時代後期の大名茶人として著名で陶芸,漆工なども振興し「茶どころ松江」の礎を築いた。

※1 親交のあった刈谷城（愛知県刈谷市）主の水野忠重の饗応を池鯉鮒（ちりゅう）（愛知県知立市）で受けた際、その場にやってきた加賀野井城（岐阜県羽島市）主加賀井重望が水野忠重を斬殺したので、吉晴が加賀井重望を組み伏せ刺殺したが、吉晴が忠重を切ったと間違われ、忠重家臣に襲われ、深手を負ったが逃げることができた。

△天守と櫓

当時を偲ぶ建物

△中櫓

△南櫓

△太鼓櫓

△石落とし

△地階の井戸（現存天守で唯一）

保存と修理

明治4年（1871）に廃藩置県により、松江藩は松江県と改称された。これに伴い松江城は陸軍省の所管となり、廃城となることになった。明治8年（1875）城内の諸建物が取り払うために競売にかけられた。天守は180円で買却される予定だったが、斐川の豪農勝部本右衛門（もとえもん）や元松江藩士高城権八らの奔走により、落札額と同額を広島鎮台に上納した。この情熱に広島鎮台の斎藤大尉が心を動かされ、存城が決まったといわている。

明治23年（1890）松江城一帯は陸軍省から松平氏に払い下げられた。この間、天守は傷みが激しくなり、明治27年（1894）市民から浄財を集めて修理が行われた。

昭和2年（1927）には松平氏から松江城は無償で松江市に寄付され、昭和10年（1935）には国宝保存法により天守が国宝となった。

昭和25年（1950）天守は文化財保護法の施行により重要文化財に指定され、同年6月から昭和30年（1955）までの5年間解体修理（昭和の大修理）が行われた。平成12年（2000）から平成13年（2001）にかけては二之丸の櫓の復元が行われた。

平成27年（2015）7月8日天守は市民の長年の願いがかない国宝に指定された。

△最上階天狗の間眺望

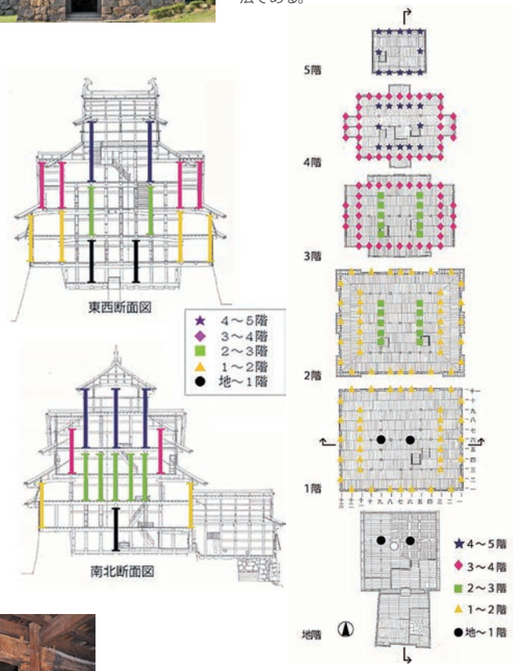
見所ガイド

堀尾吉晴の築城技術の集大成、荘重雄大な四重五階天守

加藤清正と並ぶ城普請の名人、堀尾吉晴が築いた四重五階の複合式望楼型天守。2階分を貫く通し柱を各階ごとに位置を変えて配置するなど構造上の工夫を凝らす。宍道湖畔の亀田山にそびえる荘重雄大な姿は城郭建築最盛期である慶長期の天守の特徴をよく表している。また、築城の際に重層的に執り行われた祈祷の実態は、文化史的にも極めて重要な意味を持つ。

松江城天守通し柱

合計96本の通し柱を効果的に配置し、上層の荷重を下層の柱が直接受けることなく、外側にずれながら下に伝える構造。長大な部材を用いることなく、上層になるほど平面が低減する天守の独特な建築を可能とした。城郭建築として当時の最新工法である。



包板（つつみいた）

天守の柱には一面、あるいは二面、三面、四面に板を貼って、鎹や鉄輪で留めているものがある。「包板」と呼ばれるこの技法は、現存天守では松江城だけの特徴で308本の柱のうち130本に施されている。割れ隠しなど体裁を整えるためとも補強のためとも考えられている。

祈祷の三態

【祈祷札（きとうふだ）】2枚

平成24年5月に再発見された2枚の祈祷札からは、「慶長十六」や「正月吉祥日」等の墨書が確認され、地階の2本の通し柱に打ち付けられていたことが判明した。これにより松江城天守の完成が慶長16年（1611）であることが確定したが、松江城は築城当時の史料によって完成時期を確認できる数少ない現存天守のひとつ。
（国宝附指定－松江歴史館蔵）

△祈祷札の打ち付けられていた天守地階の様子（レプリカによる再現）

【鎮宅祈祷札（ちんたくきとうふだ）】4枚

昭和の大修理（昭和25～30年）で天守の柱や梁から発見された鎮宅の祈祷札で梵字の願文が記されている。打付けられていた方位等とあわせ、真言密教の鎮宅の修法が極めて厳密に行なわれたことを示している。他の2件とともに築城に際して三態、三様の祈祷が行われたことを示している。
（国宝附指定－松江歴史館蔵）

△祈祷札（松江歴史館蔵）

△祈祷札赤外線

【鎮物（しずめもの）】3点

昭和の大修理の際に天守地階の南西隅の礎石の下から発見された鎮物の一式。築城に際して裏鬼門を封じた地祭りの鎮物で、一連の祈祷関係の史料の中で最も初期のものである。
（国宝附指定－松江歴史館蔵）

△鎮宅祈祷札

△玉石

△槍

△祈祷札

天守古材に残された刻印

昭和の解体修理工事で新材に取り替えられ保存されている古材の木口から、初代藩主堀尾氏の家紋「分銅紋」の中に「富」の文字が入った刻印が発見された。この「富」は富田城を示すものと考えられ、また、古材の端には筏に組むための穴があけられていることから、富田（現在の安来市広瀬町）から飯梨川、中海、大橋川、宍道湖を水運を利用し運ばれたと考えられる。

富田城の部材が松江城天守に転用されたことを示す貴重な資料である。

堀尾氏による富田から松江への城地選定の史実と部材転用の痕跡は、中世山城から近世城下町において高層化し、都市の象徴へと変遷した我が国城郭文化の様態を明確にあらわしている。

△千鳥破風と花頭窓

△桐材の階段

△附櫓

△地階・塩蔵

△最上階・天狗の間

△鉄砲狭間

△引き戸で階段開口部を塞ぐ仕掛け

△昭和の大修理で外された鯱（現存天守最大）

△矢狭間

縄張りの特徴

松江城は、標高約29メートルの平山城である。城の立地する亀田山は北側を宇賀山とつながっていたがこれを90mにわたって切り割り、丘陵を独立させ、内堀と武家屋敷を作った。天守のある本丸は亀田山の中央やや南に位置し、南に二之丸、東に中曲輪、二ノ丸下の段、西に後曲輪、南東には馬溜、北側には谷を挟んで本丸の規模に匹敵する北之丸などが配置されている。内堀を挟んで南には出丸である三之丸がある。本丸や二之丸などの主要な曲輪は石垣で築かれているが、北之丸、西の後曲輪などには土塁が残っている。

□ **松江城**
☎ 0852-21-4030（松江城山公園管理事務所）／8:30〜18:30＊10月〜3月は17:00まで／無休／大人680円小人290円／JR松江駅からレイクラインバス10分

城下町散策ガイド

松江城の城下町は城が立地する亀田山の北側とつながっていた宇賀山を90mにわたって切り割り、そこから出た土で埋め立て形作られた。松江城築城当時とほぼ同じ姿を残す堀や塩見縄手に残る武家屋敷、城下町での戦を想定して配置されたカギ型十字路など当時の面影が数多く残る。

□松江歴史館

松江の歴史や文化、城下町の仕組みなどを資料や映像、模型などで紹介している。常設展示で松江の歴史を学べば、まちあるきがもっと楽しくなる。また、国宝附指定の祈祷札などが収蔵され、レプリカが常設展示されている。現代の名工が目の前で作る季節の和菓子と抹茶を楽しめるのも魅力。

☎0852-32-1607／9:00〜17:00／基本展示510円／休館毎週月曜日、年末年始／JR松江駅からバス10分

□ぐるっと松江堀川めぐり

松江城築城時とほぼ同じ姿を残す堀川を約50分かけて巡る遊覧船。船頭のガイドに耳を傾けながら、水の都・松江の水景と城下町の風情が楽しめる。3ヶ所ある乗船場で乗り降り自由の1日乗船券なので、途中下船してまちあるきも楽しめる。

☎0852-27-0417／9:00〜17:00（季節により異なる）／1,600円／無休／JR松江駅からバス10分大手前堀川遊覧船乗場下車すぐ

□明々庵

松江松平藩7代藩主の松平治郷（不昧公）によって建てられたという茶室。松江は京都と金沢と並ぶ菓子処であり、今なお市民の中に深く茶の湯文化が根付いているのは大名茶人といわれた不昧公の影響。不昧公の心が随所に感じられる茶室や庭を愛でながら、抹茶と不昧公好みの和菓子が楽しめる。

☎0852-21-9863／8:30〜18:30（10月〜3月は17:00まで）／410円（抹茶410円）／無休／JR松江駅からバス15分塩見縄手下車徒歩4分

□小泉八雲記念館・旧居

松江での生活を通じて感銘を受けた松江の風土や文化、風習を世界へ情報発信し、後に「耳なし芳一」などの怪談を著した明治の文豪・小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が暮らしていた武家屋敷。その隣には、八雲の直筆原稿や初版本などの遺愛品が展示されている記念館もある。

☎0852-21-2147／8:30〜18:30（10月〜3月は17:00まで）／記念館410円・旧居310円／無休／JR松江駅からバス15分小泉八雲記念館前下車すぐ

□武家屋敷

江戸時代、松江藩の中級武士が屋敷替えによって入れ替わり住んでいた屋敷。塩見縄手に残る現在の屋敷は約280年前のもので、公私を区別していた当時の武士の暮らしぶりがうかがえる。

☎0852-22-2243／8:30〜18:30（10月〜3月は17:00まで）／310円／無休／JR松江駅からバス15分小泉八雲記念館前下車すぐ

□月照寺

松江藩主松平家の菩提寺で初代直政から9代斎貴までの墓のほか、小泉八雲の著書「知られぬ日本の面影」で夜な夜な町へ散歩に出て人々を驚かせたと書いた大亀の石碑がある。境内には四季折々の花が咲き誇り、特に6月には約3万本のアジサイが咲き乱れることから、あじさい寺とも呼ばれる。

☎0852-21-6056／10:00〜16:00（6月は8:30〜17:30）／拝観料500円／無休／JR松江駅からバス20分月照寺前下車すぐ

□ぐるっと松江レイクライン　停留所

JR松江駅を起点にレトロ調の周遊バスを20〜30分間隔で運行。松江の見どころを効率よく巡るのに便利。1日乗り放題の1日乗車券や市営バス全線も合わせて連続した2日間乗り放題の松江城手形（共通2日乗車券）があると、入館料が割引になる観光施設もあり、お得に観光が楽しめる。

☎0852-60-1111（松江市交通局）／1回乗車大人210円・小人110円、1日乗車券大人520円・小人260円、松江乗手形大人1050円・小人530円

□カラコロ工房

街中に佇むレトロな建物は、昭和初期に建てられた旧日本銀行松江支店。地下金庫室の大扉など随所に銀行の名残を残しているが、現在は飲食や雑貨、ものづくり体験ができる店が集まる憩いの場となっている。ガーデンテラスには、全国でも珍しい「ピンクの幸運のポスト」も設置されている。

☎0852-20-7000／飲食8:00〜23:00（L.O. 22:30）／施設見学無料／12月30日〜1月1日休（工房により一部定休日あり）／JR松江駅からバス8分京橋下車すぐ
※令和6年9月まで改修工事のため休館予定

□宍道湖

全国で7番目の大きさがあり、水の都松江の象徴といえる湖。淡水と海水が入り混じる汽水湖であり、特産のヤマトシジミの漁獲量は日本一を誇る。湖面にしじみ漁の小船が浮かぶ光景は、宍道湖の朝の風物詩であり、夕暮れ時には『日本夕陽百選』にも選ばれるほどの美しい夕日が空と湖面を茜色に染める。

姫路城

Himeji Castle

築城年：安土桃山時代／慶長6～14年（1601～1609）
築城者：池田輝政
所在地：兵庫県姫路市
形　状：平山城

近世城郭の美と意匠を誇る世界文化遺産

明治の廃城や昭和の戦災の危機を免れてきたことから日本の城の中で現存する建造物が一番多く、内曲輪の城郭が当時の姿をとどめている。連立式天守をはじめとする建築構造と「白鷺城」とも呼ばれる美しさ。そして戦に備えた数多く残る防備などから、日本における近世城郭の代表的な遺構として世界遺産（文化遺産）に登録されている。

△大天守

△西小天守

△乾小天守

△東小天守

現存する建物等

△石垣と天守群

築城ストーリー

時代の流れの中で

鎌倉後期、後醍醐天皇を中心とした勢力が幕府の打倒を図り、元弘の乱が起きた。天皇の皇子、護良親王の命で播磨国（現在の兵庫県南西部）の※1守護赤松則村（法名円心）が現在姫路城がある姫山に砦を築いた。そこで兵を集結させ、京の※2六波羅探題を攻めたのである。そして元弘3年（1333）、源頼朝が開いた鎌倉幕府が滅亡。

天皇の親政が始まるが、足利尊氏が離反して建武3年（1336）に室町幕府を開く。その10年後に則村の次男貞範が姫山に山城を築いた。これが姫路城の始まりだとされている。赤松氏は則村が尊氏に力添えして以来、代々幕府の※3四職の1つに任じられた。

※1 諸国の治安・警備に当たった鎌倉・室町幕府の職名
※2 鎌倉幕府の執権に次ぐ重職。六波羅の地（現在の京都市東山区五条から七条の間）に設置され、京都の警護や朝廷の監視などを担った。
※3 幕府の軍事・警察を担った侍所の長官に交代で任じられた守護大名で赤松氏・一色氏・京極氏・山名氏の4家。

室町幕府衰退、戦国時代へ

時は流れ、嘉吉元年（1441）、赤松満祐が6代将軍足利義教を暗殺した「嘉吉の乱」で赤松氏が滅亡。姫路城は赤松氏と同じ四職の一人である山名氏の領地となった。しかし※4応仁の乱で東軍についた赤松氏が活躍をみせ、後に山名氏を撃退して再興。この時、本丸が築かれたと考えられている。そして後に代々重臣の小寺氏が城主となり、続いてその重臣黒田氏が城を預かった。

※4 応仁元年～文明9年（1467～77）、室町幕府四職のうち細川勝元と山名宗全の対立に将軍の跡継ぎ問題などが絡んで争われた内乱。京都で始まった戦は諸国の大名が勝元（東軍）・宗全（西軍）のどちらかにつく全国的規模に発展した。

秀吉と池田輝政の築城

天正8年（1580）、当時城主であった黒田孝高（通称官兵衛）は、織田信長の天下統一のため播磨に入った羽柴秀吉（後の豊臣秀吉）に姫路城を献上する。秀吉は、約1年で三層の天守を築いて中国攻めの拠点とした。そして天正10年（1582）、本能寺の変が起こる。備中（現在の岡山県西部）を攻めていた秀吉は急いで毛利氏と講和を結び、姫路城で軍事を整え、明智光秀を討つために山城の山崎へ出兵したのである。翌年、秀吉は大坂城に移り、姫路城は妻ねね（後の北政所）の兄に預けられる。

そして慶長5年（1600）、関ヶ原の合戦後、徳川家康は天下統一を目前にして豊臣秀頼が西国の諸大名と結んで謀反することを危惧した。そこで諸大名と大坂城を阻む位置にある姫路城に、娘督姫の夫で信頼のおける池田輝政を配したのである。西国将軍と呼ばれた輝政は、豊かな財力と約9年の歳月を費やして城を改修する。秀吉が築いた天守を取り壊して改めて5層7階の天守を築いて完成させた城は、江戸城にも匹敵するほどの威容を持ち、徳川幕府の西の要となったのである。

姫路城の担った役割

池田氏の後は徳川家譜代の家臣本多忠政が元和3年（1617）に入城し、寛永16年（1639）に、現在に見る姫路城の全容が完成したといわれる。西の丸は長男忠刻と妻・千姫のために整備したといわれている。千姫は、二代将軍徳川秀忠の娘で家康の孫にあたる。秀吉の遺言により幼くして豊臣秀頼に嫁ぐが、大坂夏の陣で秀頼と死別。家康の計らいで大坂城中から救出され江戸へ向かう途中、忠刻と運命的な出会いをしたのである。

西国の重要拠点であった姫路城の城主は、幼嗣子の場合は交替させられた。松平・榊原・本多氏ら徳川一門や譜代の大名が城主となり、寛延2年（1749）に酒井氏が入って明治維新まで城を治めた。

世界文化遺産登録へ

明治2年（1869）の※5版籍奉還によって姫路城は兵部省管轄となると、老朽化した建物などの取り壊しが始まった。しかし陸軍省中村大佐が後世に伝えるべき価値ある文化遺産であると強く訴えた結果、保存されることになった。以来、幸いにも天災や戦争の被害に遭わなかったため他に類例をみない多くの遺構が残された。

昭和26年（1951）に国宝指定を受け、昭和31年（1956）から8年をかけて昭和の大修理が行われた。そして平成5年（1993）年、法隆寺とともに日本で初めてユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の世界文化遺産リストにその名が登録された。

平成27年3月にグランドオープンを迎え、同年には286万7千人と過去最高の入城者数を記録した。

※5 明治政府による中央集権強化のための改革で、全国の各藩主が土地（版）と領民（籍）とを朝廷に返還したこと。

昭和 平成　保存修理から学ぶ新発見！

姫路城は、昭和、平成の時代に大規模な保存修理が行われ、保存修理を重ねる度に新たな発見がありました。

羽柴秀吉時代の天守台石垣

昭和の大修理では、昭和31年（1956）から昭和39年（1964）にかけて天守群の全ての建物を解体する大規模な修理が行われました。大天守の礎石（基礎）をコンクリートに替える際には、礎石の下に古い天守台石垣が残っているのが発見され、伝承どおり、池田輝政以前の秀吉時代にも天守が建っていたことが確認されました。

このことにより、輝政は、秀吉が築城した城の縄張りの上に、新たに築城したことが判明しました。

△礎石下から出土した秀吉期の礎石と石垣

△秀吉期の天守の石垣

幻の窓

平成の修理の際には、大天守の最上階にある四隅の壁の中に、漆喰塗りの引き違い戸をはめ込むための敷居と鴨居が計８組見つかっています。

建築当初は、最上階全面を窓とした開放的なつくりとする計画だったと推定されますが、発見された敷居、鴨居に窓として使われた痕跡（摺り跡）はなく、引き戸のかわりに厚い板をはめ込んで板壁とし、外側は漆喰仕上げの土壁が施されていました。

窓を塞いだ理由は不明ですが、築城中の慶長９年（1605）に発生したマグニチュード８クラスの大地震を見聞し、耐震性を高めるために塞いだのではないかと考えられています。

△幻の窓CG画像（㈳文化財建造物保存技術協会提供）

△発見された敷居・鴨居

△大天守からの眺望

△ろの門内

△秀吉築城の名残と伝わる油壁

見所ガイド

美しくも恐ろしくもある城

白鷺城（はくろじょう／しらさぎじょう）とも呼ばれるのは、黒板張りの岡山城を烏城と呼んだのに対したという説や、白鷺の飛ぶ姿に見えるからという説などがある。築城後は戦のない時代になったため実際に威力を発揮することはなかったが、その優美な姿の中には戦の備えが万全に施されている。

国宝	大天守・東小天守、西小天守、乾小天守、イ・ロ・ハ・ニの渡櫓の8棟
重要文化財	化粧櫓、ニの櫓、折廻り櫓、備前門、水の一門、水の二門、菱の門、い・ろ・は・にの門、ぬの門など74棟

連立式天守

大天守と3つの小天守がイ・ロ・ハ・ニの渡櫓でつながれた「連立式」で見事な建築美をつくりあげている。

△天守群西面

【天守の形式】

独立式・複合式・連結式・連立式の4種類がある。

独立式：天守のみが建っている。

複合式：天守に付櫓が附属している〔彦根城／犬山城〕

連結式：天守と小天守を渡櫓でつないでいる。

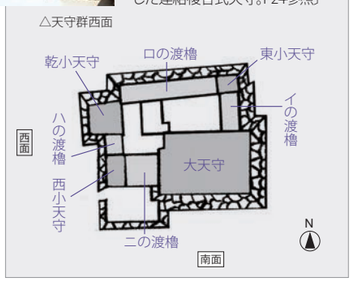
連立式：天守と小天守3棟を渡櫓でつないでいる。〔姫路城〕

〔松本城は連結式と複合式が合体した連結複合式天守。P24参照〕

① 大天守〈国宝〉

外観は白漆喰総塗込の壁と入母屋屋根に巧みに組み合わせた※1千鳥破風・大千鳥破風・唐破風の装飾が華麗な建築美をみせている。

※1 本を開いて伏せたような三角形になっている破風（P20参照）



△大天守南面

【内観の構造】

外観は5層、内部は地下1階・地上6階である壮大な天守を支えるのは地階から6階の床下までを通る直径1mに近い東西2本の心柱。西心柱は昭和の大修理で新材に、東心柱は地下部分だけ取り替えられたが、その他は築城当時のまま残されている。

②小天守〈国宝〉

天守台(天守の土台)の西北(乾の方角)に位置しているのが「乾小天守」で、東西にそれぞれ「東小天守」と「西小天守」が位置している。

【戦に備えた防御の工夫】

白漆喰総塗込

漆喰（消石灰に糊を混ぜた壁塗りの材料）で木地が見えないように覆い塗る手法。火災に備えるとともに築城の頃に普及していた鉄砲の射撃によって延焼しないように採用された。

▽武者隠し（写真の右部分）

武者隠し

大天守3階の四隅の千鳥破風の屋根裏を利用して造られた隠し部屋。武士を忍ばせ、敵を不意打ちで攻撃する。

◁石落とし

石落とし

石垣を登ってくる敵に石を落としたり、鉄砲を射ったり、槍で突いたりできる仕掛け。天守の他、塀や櫓にも多数施されている。

③西の丸長局「百間廊下」

西の丸御殿に仕えた侍女たちが暮らした部屋があり、千姫は毎朝夕ここの廊下から男山を拝んでいたと伝えられている。男山千姫天満宮は姫路城を一望する男山の中腹にある小さな社で、千姫が本多家の繁栄を願って建立した。

百間廊下▷

④化粧櫓〈重文〉

千姫の※化粧料10万石で建てられたものである。西の丸長局の百間廊下から毎日、男山の天満宮を拝んだ千姫が休息所としたことからその名が付いたとされる。内部は畳を敷いた御殿のような造りになっている。

※江戸時代の嫁入りの持参金

⑤塩櫓〈重文〉

石垣の曲線が緩やかなカーブを描く、他の城郭にはない独特の造り。その名の通り塩を蓄え、戦時の籠城に備えたといわれる。

塩櫓▷

縄張りの特徴

姫路城は標高45.6mの姫山に築かれた平山城で、螺旋状の3重の堀で防御線を構えた螺旋式※縄張り。他には江戸城だけに見られる縄張りで、頂上にある大天守を中心に南へ左巻きに渦を描くように構成されている。一周目を「内曲輪」、二周目を「中曲輪」、三周目を「外曲輪」という。現在の姫路城の範囲は内曲輪である。

※曲輪や堀、門の配置または城郭の構成。曲輪は城の周囲を土や石などで築き巡らしてある囲い。またその内側の地域をいう。

【数々の防御策】

城内道

△はの門からにの門の通路

複雑巧妙な縄張りであるため、敵が大天守を目指すには遠回りしなくてはならない。内曲輪ではまず菱の門を通り、続いてい・ろ・は…の順に名付けられた門を順に天守へ進むようになっているが、実は近道がある。さらに枝分かれしたり、広くなったり狭くなったり、急角度で折れ曲がったりと迷路のようになっている。

途中、はの門からにの門にかけての通路は大天守に背を向けなければ進めないようになっており、本丸で天守群を一周しなければ大天守へはたどり着けないようになっている。

門

外曲輪を含めて当時は84の門があったが、現在は22の門が残っている。場所が分かりにくい、極端に狭い、鉄扉であったりなど形態は様々で非常に進みにくいようになっている。中には上にある部屋の床板がはずれ、敵を頭上から槍で突くことができるものもある。

狭間

現在、内曲輪に残っているだけでも997箇所を数える。天守や櫓には壁と同じ漆喰を塗って蓋をしておき、いざという時に蓋を開け攻撃ができる「隠し狭間」もある。立ってもひざをついてでも体をふせていても撃てるように、穴の高さを変えている。※狭間は他の城でもよく見られる防御設備であるが、様々な形の狭間を見た目に良く配置してあるのが特徴である。

※ P14参照

▽狭間

⑥菱の門〈重文〉

三の丸から二の丸へ至る、城内で最も大きい門。近世の※1枡形の原形といわれており、二の丸への入口を固めている。両柱の上の冠木に木彫りの菱の紋があることからこの名前が付けられた。

全体に安土桃山時代の様式を残し、※2火灯窓で飾られている美しい門であるが、左右に連なる塀の狭間から敵を迎え撃つ。

※1 P25参照　※2 P14参照

△ろの門

⑦ろの門

人一人がやっと通れるほどの広さの石垣に折れ曲がって急な石段を付けた門。石垣に隠された抜け穴のようであることから穴門とも呼ばれ、門扉を閉めると土砂で封じることができる埋門でもあった。

⑧三国堀

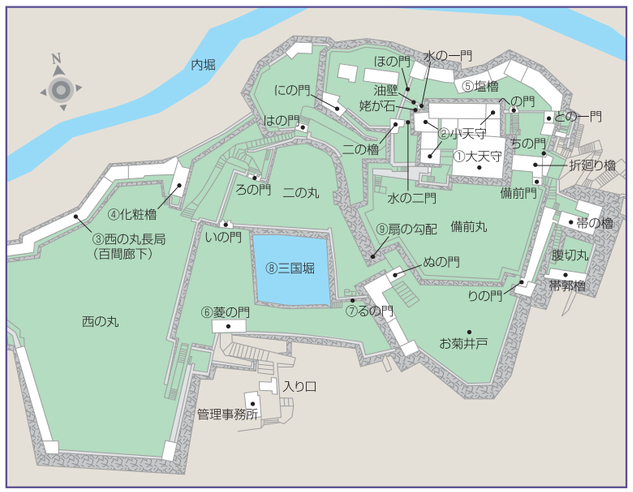
菱の門内にある堀で二の丸の本道と間道の要所を抑えている。

△三国堀

▽扇の勾配

⑨扇の勾配

上にいくほど反り上がるような石垣になっており、開いた扇の曲線に似ていることから名が付いた。敵に容易に登らせないための工夫だといわれている。



□ **姫路城**

☎ 079-285-1146 姫路城管理事務所／9:00～16:00（閉城は17:00）※4月下旬～8月は1時間延長／大人1,000円 小人300円（好古園共通券 大人1,050円 小人360円）／12/29～30休／JR・山陽姫路駅から徒歩15分

城下町散策ガイド

城下町は関ヶ原の合戦後の慶長6年（1601年）に姫路城の築城とともに拡張工事が始まった。城を中心に左へ螺旋状に内曲輪、中曲輪、外曲輪（総曲輪）と三重の堀を巡らせ、外堀で町全体を囲む、日本でも数少ない「総曲輪」と呼ばれる町が完成した。残念ながら太平洋戦争の大空襲でそのほとんどが失われてしまったが、「魚町」「塩町」「呉服町」といった町名や町家が少数だが残っている。

□姫路城西御屋敷跡庭園　好古園

市制100周年を記念して平成4年（1992）に造営された、池泉回遊式の日本庭園。発掘調査で確認された西御屋敷跡・武家屋敷跡等の遺構を活かして、9つの趣の異なった庭園群で構成されている。

姫路城を借景にした江戸時代を偲ばせるたたずまいは、時代劇に度々登場している。

☎079-289-4120／9:00～17:00（入園は16:30まで）※季節によって時間延長あり／310円（姫路城共通券1,050円）／12/29・30休／JR・山陽姫路駅から徒歩15分

□千姫の小径

姫路城中堀と船場川にはさまれた遊歩道。北の方から西の丸を見上げると、延々と続いている美しい長局の白壁が鑑賞できる。

水辺にはシラサギが戯れ、春は桜、初夏はショウブ、秋は紅葉と季節感を楽しむことができ、市民の憩いの散歩道にもなっている。

□姫路市立動物園

姫路城三の丸広場に隣接するお城の見える動物園。内堀を散策しながらライオン、キリンをはじめ、たくさんの動物を見学することができる。

☎079-284-3636／9:00～17:00（入園は16:30まで）／大人250円、小人（5歳～中学3年生）50円／12/29～1/1休／JR・山陽姫路駅から徒歩15分

□姫路市立美術館

明治時代の建物を利用した赤レンガが美しい美術館。地域ゆかりの画家や国内外のアーティストの作品を収蔵している。近代フランス絵画を中心とした常設展示やユニークなテーマの企画展など多彩な展覧会にも注目。

☎079-222-2288／10:00～17:00（入館は16:30まで）／一般210円、大高生150円、中小生100円（特別展別途）／月曜休（祝日の場合は翌日）、年末年始、臨時休館の場合あり／JR・山陽姫路駅から徒歩20分

□兵庫県立歴史博物館

姫路城など兵庫の歴史や祭り、こども文化について学べる。故・丹下健三氏が設計した博物館の建物も見どころの一つ。

☎079-288-9011／10:00～17:00（入館は16:30まで）／大人200円、大学生150円、70歳以上100円、高校生以下無料／月曜休（祝日の場合は翌日）／JR・山陽姫路駅から神姫バスで約8分。「姫山公園北・博物館」下車すぐ

□姫路藩文化観光学習船

四季折々に趣きを変える世界遺産姫路城を船上から眺めてみよう。

開催場所	姫路城内堀
開催時間	午前9時30分から午後3時30まで40分毎に運航
定休日	要問い合わせ
料金	大人1,500円、小人（3歳～小学生）500円
交通アクセス	JR・山陽姫路駅から徒歩15分
問い合わせ	☎079-280-3371（姫路藩和船文化協議会）

□城周辺観光ループバス

姫路城の周りをぐるりと走るループバス。環境に配慮した電気バスにゆられて、姫路城の美しさにふれてみよう。

運行日	3月～11月の毎日と12月～2月の土曜日・日曜日・祝日（正月1月1日～3日は特別ダイヤで運行）
運行時間	午前9時（始発）～午後5時（最終） 15分～30分間隔で運行 ※1周約20分
料金	1回：大人190円、小人（6歳～小学6年生）100円 乗り自由の1日券もあります。 （1日券大人400円、小人200円、神姫バス姫路駅前案内所で販売）
1日券の特典	姫路城、好古園、市立美術館（常設展のみ）、姫路文学館（常設展のみ）は『2割引』、県立歴史博物館は『団体料金適用』となります
問い合わせ	神姫バス姫路駅前案内所 ☎079-285-2990

□姫路文学館

姫路城の物語や播磨ゆかりの文人達の資料を展示している。南館（無料）には、姫路ゆかりの作家・司馬遼太郎の作品と生涯をつづった記念室がある。安藤忠雄建築も見どころ。

☎079-293-8228／10:00～17:00（入館は16:30まで）／一般450円、大高生300円、中小生150円（特別展別途）／月曜休（祝日の場合は翌日）、祝日の翌日（土・日は除く）、年末年始休／JR・山陽姫路駅から神姫バスで約7分。「清水橋（文学館前）」または「市之橋・文学館前」下車、徒歩3分

□シェアサイクル「姫ちゃり」

姫路城周辺にはたくさんの観光施設がある。
電動アシスト付き自転車で、ぜひ散策してみよう。

利用料金	1回利用：30分165円 月額利用：月2,200円 １日パス　1,430円（コンビニ、専用Webサイト） 1,650円（有人窓口）
利用時間	24時間（一部ポートを除く）
利用方法	専用のスマートフォンアプリからご利用できます。専用のポートであれば、どこでも借りたり、返したりできます。 詳しくは「姫ちゃり」ホームページをご覧ください。
問い合わせ	☎0570-783-677 【午前7時から午後7時まで（事故など緊急時は24時間）】

「姫ちゃり」ホームページ
https://docomo-cycle.jp/himeji/

□ 姫路観光なびポート（観光案内所）　☎079-287-0003

※ 各施設の入場料は令和6年4月1日時点の金額です。

世界遺産暫定リスト登載
築城年：江戸時代／慶長9年（1604）～元和8年（1622）
築城者：井伊直継・直孝
所在地：滋賀県彦根市
形　状：平山城

彦根城

Hikone Castle

旧彦根藩井伊家三十五万石の威風を今日に伝える

築城以来4世紀の歴史を有する彦根城は碧い琵琶湖を背景に、現在も二重の堀に囲まれた緑豊かな城郭林の中に、三重白亜の国宝天守が天秤櫓等の重要文化財の櫓を従え、威風堂々たる姿を今日に伝えている。城内には名勝庭園や復元された表御殿等もあり、貴重な文化遺産と自然とが織りなす四季折々の風情が訪れる人々を魅了する。

築城ストーリー

時は天下分け目の戦「関ヶ原の合戦」

彦根城の歴史は、慶長5年（1600）9月15日の関ヶ原の戦いで始まった。後に※1徳川四天王の一人に称される井伊直政により火蓋が切られた天下分け目の大戦は、西軍方武将の裏切りもありわずか一日で勝敗が決し、江戸幕府開府の礎となった。

直政はこの戦での武功により翌年、敵将であった石田三成の居城、佐和山城を与えられ初代彦根藩主となる。しかし時代に即した新たな城の建設を決意するも、関ヶ原の鉄砲傷が元で慶長7年（1602）に死亡する。直政の意思を継いだ※2嫡子直継は家老の木俣守勝を通じて城の移築計画を徳川家康に諮り、彦根山への移築が決定される。築城は慶長9年（1604）から始まり、その際、中世以来の山城であった佐和山城の石垣や建造物の多くが彦根山へと運ばれたと伝わる。

※1 徳川家康の天下取りに功績した井伊直政・酒井忠次・榊原康政・本多忠勝ら4人の武将。
※2 世継ぎの子ども

彦根城の役割

彦根の地は古来より東山道（後の中山道）と北国街道との分岐点に立地し、琵琶湖にも面した交通の要衝であったことから鎌倉時代初期には佐和山に城館が築かれ、この要衝の地を巡る戦いが幾度も繰り返されていた。織田信長や豊臣秀吉も佐和山城主に丹羽長秀や石田三成等の重臣を配するほど重要視していた。家康は関ヶ原の戦い後も依然として強い勢力を有する豊臣家と豊臣色が強い西国大名を抑える必要もあることから井伊家を配し、彦根城の築城を急がせた。

二期にわたった築城工事

彦根城の築城は約20年もの歳月を要したが、その工事は前期と後期に分かれた。前期（慶長期）の工事は幕府から奉行が派遣され、近隣諸国の大名にも手助けが命じられる※3幕府普請（天下普請）として取り組まれた。

慶長12年（1607）頃には天守や鐘の丸等の城郭の主要な部分が完成したが、慶長19年（1614）から翌年にかけての大坂の陣の間は工事が中断された。この戦の終了後、後期（元和期）の工事が彦根藩単独で再開され、城下町を含めた城郭の全容が元和8年（1622）頃までに完成したのである。

※3 幕府主導による築城工事

△天秤櫓（てんびんやぐら）〈重文〉

△太鼓門櫓（たいこもんやぐら）〈重文〉

現存する建物等

△西の丸三重櫓（さんじゅうやぐら）〈重文〉

△馬屋（うまや）〈重文〉

▽二の丸佐和口多聞櫓（たもんやぐら）〈重文〉

修築と保存

完成した城は時の流れとともに傷みが生じ、風水害、地震、火災などの災害にも度々見舞われた。関連する資料から藩が幕府の許可を得ながら城を維持していく様子がうかがえる。

明治維新を迎えて武士を中心とした政治が終わろうとしていた中、彦根城の解体が始まった。ところが明治天皇の北陸巡幸に同行した大隈重信が彦根城に立ち寄り、その消失を惜しみ天皇に保存を願い出たことから解体が中止されたという。また天皇の従姉妹が懇願したとも伝わるが、いずれにしても彦根城は幸運にも一部解体されたものの主な建物などは保存され現在に至っている。全国的に見ても築城当時の姿がしのばれる保存状態の良い城郭として昭和31年に一帯が特別史跡となった。

☎0749-22-2742（彦根城運営管理センター）／8:30〜17:00（最終入場16:30）／無休／観覧料金はHPでご確認ください／JR彦根駅から徒歩10分

近世城郭を偲ぶ城

近世城郭は藩主が治める領地の軍事・政治・経済等の拠点であった。彦根城は、軍事拠点としての天守や堀等の防御構造だけでなく、政治や文化の拠点としての表御殿や下屋敷、さらに経済の拠点としての城下町も良好な姿で残されている。

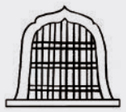
① 天守〈国宝〉

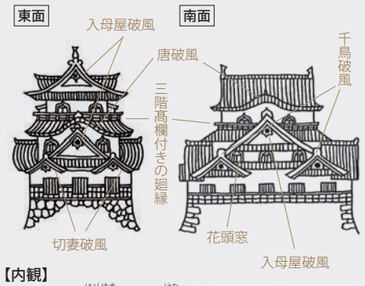
牛蒡積の石垣の上に築かれた三階三重の天守。通柱を用いず各階ごとに積み上げていく方式をとっている。

三重の屋根には「※1切妻破風」「入母屋破風」「唐破風」を組み合わせ、二階と三階に「花頭窓」、三階の望楼には高欄付きの廻縁を四隅に取り付けるなど変化に富んでおり、美的完成度が極めて高い天守である。

【花頭窓】

花頭窓は窓枠の上部が尖った花弁のような形の曲線が美しい窓。火を思わせる曲線から「火灯窓」とも書く。日本では中世以降、主に寺院建築に使われた。





【内観】

木組みは梁行に対し桁行が2倍近くある平面が特長。東・西面は先鋭で垂直な方向性が感じられるが、南・北面では安定感が強く感じられる。

【鉄砲狭間】

鉄砲狭間は敵の来襲に鉄砲で防戦するための銃眼。外からは見えないようにしっくい壁が塗り込められている。同じ仕様の「矢狭間」もある。彦根城天守には75箇所もの鉄砲、矢狭間がみられる。

② 二の丸佐和口多聞櫓〈重文〉

佐和口に向かって左翼に伸びる※2多聞櫓は明和4年（1767）に城内で発生した火災で類焼し、明和6年（1769）から8年（1771）にかけて再建された。

なお右翼に伸びる多聞櫓は昭和35年に井伊大老開国百年事業として復元された建物である。

③ 天秤櫓〈重文〉

大手門と表門からの山道が合流する要の位置に築かれた櫓で、両隅に二階建ての櫓を設けて中央で門が開く構造となっている。あたかも天秤のような形をした櫓であることからその名称が付けられた。このような構造の櫓は類例がなく、均整のとれた美しさと堅固さを兼ね併せている。

なお、この櫓も長い年月が経過する中で何度も修理が重ねられているが、嘉永7年（1854）の修理は石垣まで積み替えている。廊下橋から見て右側が築城当時の※3牛蒡積で、左側が嘉永年間に積み替えた切石の※4落とし積みである。

▽落とし積（左側）

▽牛蒡積（右側）

④ 太鼓門櫓〈重文〉

本丸への最後の関門である櫓門で太鼓をおいて城中に合図したところからこの名が付いた。向かって左側に山の岩を加工して自然の石垣としている箇所がある。東側の壁が無く柱の間に高欄をつけ廊下にしているという珍しい構造になっている。

⑤西の丸三重櫓〈重文〉

天守の他に彦根城内にあった三階の建物の一つで、本丸に隣接する西の丸の西北隅に位置する三重櫓。東側と北側にそれぞれ一階の続櫓を「く」の字に付設している。天守のように装飾的な破風はないが、全体を総漆喰塗とする質素な中にも気品のある櫓である。

⑥馬屋〈重文〉

藩主などの馬21頭を常時、使用できるよう収容していた建物で、全国の近世城郭に残る大規模な馬屋として他に例がない。

※1 P20参照　※2 細長い様式の櫓で武器の倉庫などに用いられる他、城壁の役割も果たしているため防御上重要な箇所に建てられる事が多い。松永久秀（1510〜1577）が奈良に築いた多聞城で初めて築かれたのが起源であるという。　※3 胴長の石を使用し、積む際に面積の大きい面を内側に押し込む。隙間が大きく見た目は弱々しく見えるが実際にはかなり強固である。　※4 現代のブロック積みで最も一般的な積み方である谷積み(石を斜めにして積み上げる手法)のこと。乱雑で不規則なものが多い江戸期の谷積みは「落とし積み」と呼ばれている。

⑦ 玄宮楽々園〈名勝〉

4代藩主の井伊直興が延宝5年（1677）頃から松原内湖に臨む彦根城の搦め手（裏手）の第二郭に下屋敷として造営した御殿である。建物部分を「楽々園」、庭園部分を「玄宮園」と呼び分けている。

玄宮園は広大な池を中心に池中の島や入り江に架かる橋など変化に富んだ近世前期の回遊式庭園である。下屋敷や庭園が城内に現存するのは彦根城だけである。

☎0749-22-2742（彦根城運営管理センター）／8:30〜17:00（最終入場16:30）／無休／観覧料金はHPでご確認ください／JR彦根駅から徒歩10分

⑧ 表御殿［彦根城博物館］

表御殿は彦根藩の政務をとり、合わせて藩主が日常生活を営んでいた所。明治11年（1878）に解体されたが、発掘調査を経て昭和62年（1987）に彦根城博物館として蘇った。

政務に用いられた表向きは外観のみ復元し、内部は井伊家に伝わる美術品や古文書を展示している。藩主の私的空間であった奥向きは木造で忠実に復元されている。

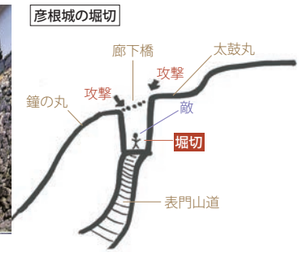
☎0749-22-6100／8:30〜17:00（入館は16:30まで）／観覧料金はHPでご確認ください／彦根城内

縄張りの特徴

彦根城は近世初期に築城されたが、本丸防御のために設けられた堀切など中世以来の山城の構造も有している。また築城目的が関ヶ原の合戦後の豊臣勢力の監視ということもあり、早期の築城を要したため佐和山城はもとより、小谷城や長浜城、大津城など近隣の旧城郭の建物や石垣などの資材を多用して造られたと伝わる。なお全山を覆う深い緑の城郭林は城郭の構造を隠すとともに、籠城時には食料や薬などに用いるよう植えられたものである。

⑨ 堀切

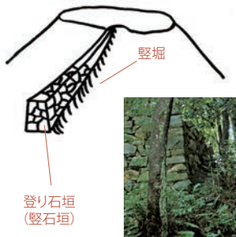
鐘の丸と太鼓丸の間に、尾根を垂直に切り裂いた空堀がある。大手門や表門から侵入した敵の防御策として設けられたものである。この堀切の上には廊下橋が架けられているが、往時は落とし橋となっており、敵が侵入した際には落とされ、天秤櫓と鐘の丸の両側から迎撃できる構造となっていた。西の丸と出曲輪との間にも同様の堀切が現存している。



⑩ 登り石垣と竪堀

登り石垣は敵の斜面の移動を防ぐため設けられた山頂部から山裾に向けて設けられた石垣で、大手門などに合計5カ所に設けられている。

彦根城では登り石垣の上に瓦葺きの塀が巡らされていた。これは豊臣秀吉が朝鮮半島に攻め入った文禄・慶長の役の際、築いた倭城（日本の城）に多用した防御施設で、現在、日本では彦根城の他、洲本城（兵庫県）と松山城（愛媛県）などで確認されている。



⑪ 内堀の石垣

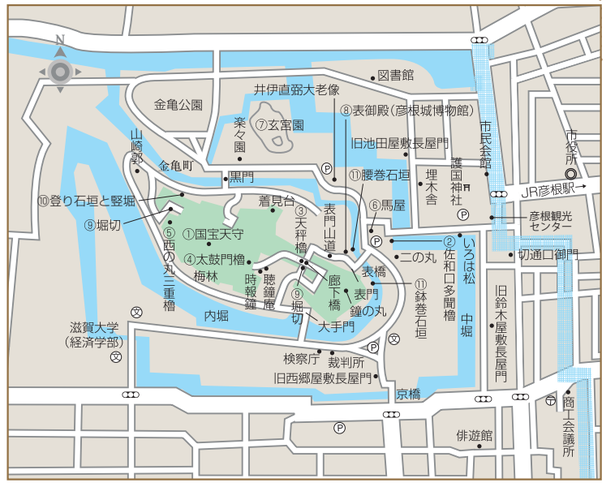
内堀に面して石垣の上部が土塁となっているものが腰巻石垣で、土塁の上部に石垣を用いているものが鉢巻石垣と呼ばれている。このような石垣は関西ではほとんど見ることができないが、関東以北の近世城郭に確認される手法である。

△鉢巻石垣

△腰巻石垣

【リサイクルの城】

彦根藩主井伊家の歴史を綴った井伊年譜に天守は大津城の天守を移したものと記述されている。その他天秤櫓や西の丸三重櫓、太鼓門櫓も近隣の長浜城など他の城から移築されたと伝える。このことは豊臣勢力の監視という役割を担った彦根城を早期に完成させる必要があったからであり、転用材を上手く使用するという木造だからこそ出来た我が国ならではのリサイクルである。



□**彦根城**　☎0749-22-2742（彦根城運営管理センター）／8:30〜17:00（最終入場は16:30）／無休／観覧料金はHPでご確認ください／JR彦根駅から徒歩10分
□**玄宮園**　☎0749-22-2742（彦根城運営管理センター）／8:30〜17:00（最終入場は16:30）／無休／観覧料金はHPでご確認ください／JR彦根駅から徒歩10分
□**彦根城博物館**　☎0749-22-6100／8:30〜17:00（入館は16:30まで）／年末休館、その他休館あり（詳細はHPへ）／観覧料金はHPでご確認ください／彦根城内

城下町散策ガイド

彦根城の城下町は中堀と外堀に囲まれた区域に武家屋敷や町屋が割り当てられ、特定の職業集団が住んでいた。現在も細く曲がりくねった町筋を中心に、武家屋敷長屋門や町屋などが往時の面影を伝えている。

□夢京橋キャッスルロード

中堀にかかる京橋から南に延びる通りに再現された古くて新しい街並み。建物は白壁、黒格子、切妻屋根など町屋風に統一され、飲食店、雑貨店、土産物屋が軒を連ねる。

□四番町スクエア

夢京橋キャッスルロードに隣接する「大正ロマンあふれるまち」をコンセプトに「食文化」をテーマとした彦根の新名所。大正ロマン風にデザインされた空間に飲食店、食のテーマ館「四番町ダイニング」などが集まる。

☎0749-27-7755（㈱四番町スクエア）

□花しょうぶ通り

久佐の辻から東へのびる「ふるあたらしいまちづくり」をコンセプトとした商店街。

JR彦根駅から徒歩15分

□佐和山城跡

鎌倉時代初期に近江守護佐々木氏によって麓に館が築かれ、永禄4年（1595）に石田三成が城主となる（異説あり）。関ヶ原の合戦後、彦根城築城にともない破城となり、多くの石垣や建物が彦根城へと運ばれたと伝わる。現在は大手の土居や内堀、登城道、そして千貫分の値打ちがあるといわれた「千貫の池」が400年前の面影を伝えてくれる。

☎0749-30-6120（彦根市観光交流課）／JR彦根駅から徒歩25分（登山口から山頂まで35分）

□龍潭寺

佐和山の麓にある禅宗の古刹。学問のお寺として栄え、学僧の教科目で造られた庭園が残る。特に方丈南庭は白砂に48の石を組んだ「補陀落の庭」としてその美しさが知られている。

☎0749-22-2777／9:00〜16:00／400円／JR彦根駅から車10分

□大洞弁財天（長寿院）

この地が彦根城の鬼門にあたるとして4代藩主直興が信仰していた弁財天を祀ったものである。

石段を登り山門をくぐって振り返ると山門を額縁に彦根城が収まって見える。

☎0749-22-2617／9:00〜17:00／無料／JR彦根駅から車15分

□天寧寺

11代藩主直中が不義の子を身ごもった腰元に死を命じたが、後に相手が息子だと知って母子の供養のために建てた寺。

本堂横の羅漢堂の五百羅漢像の中には必ず会いたい人の顔があるという。

☎0749-22-5313／9:00〜16:00／400円／JR彦根駅から徒歩30分

▽彦根御城下惣絵図（彦根城博物館蔵）

松原内湖と外堀は埋め立てられているが、町割りはほとんど変わっていないことが分かる。

□彦根ご城下巡回バス

井伊家の家紋でもある橘のデザインがラッピングされたバスが市内を巡回する。1日乗り放題のお得な周遊チケットもある。

停留所

☎0749-25-2501（湖国バス㈱彦根営業所）／3月末〜12月上旬の主に土・日・祝運行／1日券（乗り放題）400円、12歳未満200円、1乗車210円（1日14便）、12歳未満110円

□ゆらっと遊覧 彦根城お堀めぐり

旧彦根藩主、井伊家ゆかりの御好屋形船を再現した船で、優雅な気分で彦根城の内堀を巡る。春・秋の夜間特別運行と冬期（12〜2月）の運行に関しては要問合せ。

☎080-1461-4123（NPO法人小江戸彦根）／10:00〜15:00（土・日・祝のみ16時便あり）／大人1,500円・小学生以下700円・3歳児以下無料・障がい者とその同伴介助者800円／JR彦根駅から徒歩10分

□琵琶湖遊覧（彦根港）

見る方向によっていろいろな景色をみせることからその名がついた「多景島」コースと琵琶湖八景のひとつにも数えられている「竹生島」コースがある。

☎0749-22-0619（オーミマリン彦根港支店）／多景島＝所要時間1時間10分大人1800円・小学生900円、竹生島＝所要時間2時間30分大人3000円・小学生1500円（別途入島料として大人600円・小学生300円が必要）／JR彦根駅からシャトルバス10分彦根港下車すぐ

築城年：室町時代／天文6年（1537）頃
築城者：織田信康
所在地：愛知県犬山市
形　状：平山城

犬山城

Inuyama Castle

木曽川に映える我が国現存最古の天守

日本に現存する天守の多くは江戸期のものである中で織田信長や羽柴（豊臣）秀吉が天下統一を目指していた安土桃山時代に築かれたという貴重な天守である。華麗な装飾は少ないが独特の風格に江戸期の天守とはまた違う崇高さと重厚感が感じられる。別名「白帝城」、江戸時代の儒学者荻生徂徠が中国の詩人李白［701～762］の詩からとって命名したと伝えられている。

築城ストーリー

後堅固の城誕生

犬山城は天文6年（1537）頃に織田信康が築いたと伝えられている。信康は織田信長の父信秀の弟で信長の叔父にあたる人物である。木曽川南岸に築城された天守は背後が断崖になる兵法でいう「後堅固の城」であった。また主要な街道に通じていたことから攻防戦の要にもなった。

天文13年（1544）、織田信秀が美濃（現在の岐阜県）の斎藤氏を攻めた「稲葉山城攻め」に出陣した信康が死去、その子信清が城主となる。しかし永禄8年（1565）、信長に反抗したため攻められ逃亡、その後信長の家臣である池田恒興が入城した。

戦局を左右した城

天正10年（1582）、本能寺の変で信長が倒れた後、後継者争いで戦国の世はさらに乱れる。翌年の「賤ヶ岳の戦」で羽柴（豊臣）秀吉は柴田勝家を討ち、その翌年に信長の次男信雄・徳川家康軍との「小牧・長久手の戦」の幕が切って落とされた。

戦場は伊勢（現在の三重県）になると予想された。この時犬山城では、当時の城主が伊勢へ救援に出かけており不在の中、秀吉側に付いた池田恒興が夜が更けてから兵に木曽川を渡らせ城内に侵入させた。この奇襲攻撃で犬山城はあっさり落城してしまい、秀吉が大坂城を出発して入城した。そして家康が本陣とした小牧山城近くの楽田城に本陣を構えたのである。以後、戦は両軍のにらみあいが続く長期戦となり、結局、秀吉と信雄が和睦を結んだことで終結した。

現存天守の創建年代にはいくつかの説があるが、小牧・長久手の戦い直後、天正13年（1585）～18年（1590）の間に、1階から4階まで一気に築城されたとみられる。

激動の時代の中で

その後、戦略の要地であった犬山城の城主は目まぐるしく替わり、文禄4年（1595）頃、秀吉の家臣である石川光吉が城主となった。慶長5年（1600）の関ヶ原の合戦後には家康側の小笠原吉次が入城した。

元和3年（1617）に、※1尾張徳川家の※2付家老・成瀬正成が、二代将軍秀忠より犬山城を※3拝領し、3万石の城主となった。正成は幼年期から家康に仕え、小牧・長久手の戦いで初陣、その後も功績をあげ、側近の一人となり、慶長15年（1610）に尾張藩の幼い藩主義直の補佐役として、尾張徳川家の付家老となることを命じられていた。

正成が城主であった元和6年（1620）頃、高欄を四周に巡らし、唐破風を設け、現存の天守の姿ができたと伝わっている。

初代正成以降、成瀬家が明治まで代々犬山城主を務めることとなる。

天災を乗り越えて

城主といえども付家老は家臣とみなされ、成瀬家は大名とも藩主とも認められず、成瀬家は七代正壽の頃より地位と待遇の向上を求めるようになった。そして、明治に改元する年にようやく犬山藩が認められる。翌年の※4版籍奉還で9代正肥が知藩事に任ぜられ、犬山城は国の所有となった。明治6年の「廃城令」により、天守以外のほとんどの建物が移築、または取り壊されてしまった。

明治24年（1891）秋、岐阜県美濃地方と愛知県尾張地方を後に「濃尾大震災」と呼ばれる猛烈な地震が襲った。マグニチュード8.4、死者7,466人、家屋全半壊22万戸余。犬山城も天守が半壊するという大きな被害に見舞われ、県議会では財政的な理由から修復か解体かの激論が交わされた。そんな中、地域住民や犬山ゆかりの人々が保存を強く望み、修復をするという条件で成瀬家に無償譲渡されることになった。そして、城は無事修復されたのである。

昭和10年（1935）に国宝に指定され（昭和27年（1952）に再指定）、昭和36年（1961）から解体修理が始まり、昭和40年（1965）に完了。平成16年（2004）3月まで全国唯一の個人所有の城として保存されてきたが、現在は「公益財団法人犬山城白帝文庫」所有となっている。

※1 江戸時代、尾張藩（現在の愛知県西部）を治めた徳川御三家（徳川氏のうち将軍家に次ぐ地位の三家）の一つ。
※2 分家した家に本家より補佐・監督する役割を担って配された家老。
※3 主君から領地を与えられること。
※4 明治政府による中央集権強化のための改革で全国の各藩主が土地（版）と民衆（籍）とを朝廷に返還したこと。

△地下1階内部

△4階高欄の間

現存する建物等

△石落とし（→P19）

▽天守から望む木曽川

見所ガイド

戦国期を語る苦節の名城

悲願で独立するも明治維新で廃城となり、濃尾大震災で半壊。幾度の逆境を乗り越えてきた苦難の城である。二重櫓の入母屋造りに望楼をのせた外観3層内部4階（地下2階）には今にも武士が走り出てきそうな雰囲気が漂う。独特の存在感と飾り気のない言葉で心を捉える、そんな魅力をもつ城である。

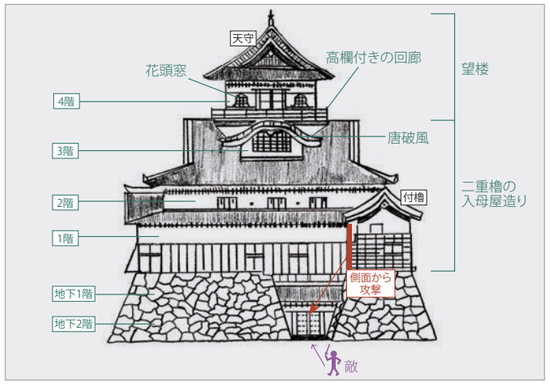
① 天守

【地下1・2階】
天守の出入り口になっており、天守を支える石垣の構造を見ることができる。

【1階】
中央部が4室（上段の間・納戸の間（武者隠し）・第1の間、第2の間）に区分され、それらを取り巻くように※武者走りが巡っている。

※ 櫓など各層内部の一番外側に設けられた通路。

△武者走り



上段の間
高くした床に畳が敷き詰められ、床（とこ）・違い棚が設けられた書院造りの間となっている。城主の居間とされ、江戸時代の改造と考えられている。

△上段の間

納戸の間（武者隠し）
万一を警護する武士が控えた部屋。

石落としの間
「石落とし」は石垣より突出している防備で、石を落としたり、矢や鉄砲を用い石垣からの侵入者を防いだ。犬山城の場合は崖面にあたる北東と北西に設けられている。内部は4畳ほどの広さの石落としの間となっている。

△石落としの間

◁付櫓内部

付櫓（つけやぐら）
天守の南部に位置し、天守の入り口が敵兵に攻められた時、側面から攻撃を加えて防備する。明治の濃尾大震災で石垣のみ残して倒壊してしまったが復元された。

【2階】
中央が武具の間で西北東の三方に武具棚が備えられている。1階と同じ武者走りが巡っている。

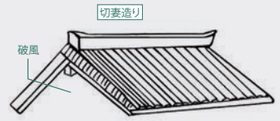
【3階】
破風の間
南北に施されている唐破風は元和6年（1620）頃、成瀬氏によって付加されたといわれている。東西には入母屋破風が施されている。

△2階武具の間

△3階破風の間

【破風】
屋根の妻（端）にある三角形の外壁部分。日本建築の切妻造りや入母屋造りといった屋根の形によって切妻破風・入母屋破風・唐破風・千鳥破風などがある。

- **唐破風**　中央が上向きに反り左右が下向きに反って弓なり状になっているものをいう。
- **入母屋破風**　入母屋造り（切妻造りの屋根の四方にひさしを葺き下ろして一つの屋根としたもの）の妻にある破風。



【4階】
高欄の間
廻縁（まわりえん）は成瀬氏による改修とされ、高欄（こうらん）がまわる4階は※1望楼（ぼうろう）となっている。濃尾平野の見事な展望が楽しめ、対岸は岐阜県で当時の美濃の国である。晴天の日には※2小牧山城や※3岐阜城を望むことができる。

屋根を見下ろすと亀の甲羅に桃が載った形をした魔除けの瓦がある。装飾ではあるが※4花頭窓が華やかさを添えている。

※1 遠くを見渡すための櫓
※2 永禄6年（1563）に織田信長が築く。「小牧・長久手の戦い」に際して徳川家康により改修されるが、戦後廃城となった。。
※3 永禄10年（1567）、斎藤氏の居城稲葉山城を信長が攻略して岐阜城と改称。関ヶ原の戦いの後廃城となるが、昭和31年（1956）に天守が復元された。
※4 P14参照

◁天守から
南方への眺望

縄張りの特徴

木曽川南岸、標高85mの山に築かれた犬山城は断崖に守られた典型的な後堅固の城である。本丸、杉の丸、樅の丸、桐の丸、松の丸を南方に階段状に連ねて配置した※梯郭式（ていかくしき）縄張りであった。天守の他に現存する建物はないが、石垣、空堀などの遺構が残されている。

※ 本丸を城郭の片隅に配置し、周囲の2方向あるいは3方向をほかの郭で囲む縄張り。本丸の背後を川や断崖とすることが多い。

△犬山城下絵図（明治初年）

② 犬山市文化史料館

本館では、歴代城主成瀬家伝来の刀剣・甲冑・鉄砲・古文書など重要文化財を含む貴重な史料を展示している。2双にわたって描かれている長篠・長久手合戦図屏風（犬山市指定文化財）は代表的な美術品の一つ。長篠合戦図には初代正成の父の正一が、長久手合戦図には初代正成の初陣の勇姿が描かれている。また、南館では、犬山祭の山車からくりの古人形や座敷からくりをはじめとしたからくり文化にまつわる様々な史料を展示している。

☎0568-62-4802／300円／9:00～17:00／12月29日～31日休／名鉄犬山駅から徒歩15分

◁長篠合戦図屏風

◁長久手合戦図屏風

（公財）犬山城白帝文庫蔵

□ **犬山城**
☎0568-61-1711犬山城管理事務所／550円／9:00～17:00／12/29～12/31休／名鉄犬山駅から徒歩15分

参考文献：週刊名城をゆく20犬山城／小学館

城下町散策ガイド

犬山城下町は武家屋敷と町家、商家全体を城郭の中に取り込んで堀と土塁で囲んだ惣構えという方法で建設された。残念ながらその遺構はほとんど残っていないが、木戸跡のクランクや、当時と同じ道節城下町の風情は残る。江戸初期には武士の生活を支える特権商人犬山衆が発生、市が盛んに開かれた。現在の城下町のメインストリートである本町通りがその名残である。

□旧磯部邸〈国登録有形文化財〉

犬山城大手門から延びる本町筋にある江戸時代の建築様式を持つ木造家屋。緩やかなふくらみのある「起り屋根」は市内の町家で唯一現存する。間口が狭く奥行きが広い「ウナギの寝床」のような構造は間口の広さで決まっていた当時の税金に対する民衆の知恵であると言われている。

☎0568-65-3444／9:00-17:00／無料／12/29〜12/31休／名鉄犬山線犬山駅から徒歩10分

□如庵〈国宝〉

茶の湯の創成期に尾張国が生んだ大茶匠「有楽斎」が元和4年（1618）頃に京都建仁寺の正伝院に設けた茶室。有楽斎こと織田長益は織田信長の実弟である。昭和47年（1972）に市内の名鉄犬山ホテル内有楽苑に移築され、現存する茶席三名席の一つとして国宝に指定されている。

☎0568-61-4608有楽苑／大人1,200円／無休／名鉄犬山線犬山遊園駅から徒歩8分

□針綱神社

五穀豊饒、厄除、安産、長命などに御利益があるとして古来より信仰が厚い。寛永12年（1635）に始められたという4月の例祭は「犬山祭」として全国的に有名。ユネスコ無形文化遺産にも登録され、13輌の車山全部で「奉納からくり」を行う祭りは全国でも類がないと言われる。

☎0568-61-0180／名鉄犬山駅から徒歩15分

□どんでん館

犬山祭で曳かれている車山13輌のうち4輌を展示している。漆塗りに金箔などの精巧な装飾、金糸の刺繍が施してある豪華な幕などは同じように見えても一つずつ造りが違う。祭の一日を短縮した音響と照明で実際の祭りの雰囲気が楽しめる。「どんでん」とは車山の方向転換を表す言葉。

☎0568-65-1728／9:00-17:00／100円／12/29〜12/31休／名鉄犬山線犬山駅から徒歩10分

□木曽川うかい

1,300年の伝統を誇る「木曽川うかい」は、手縄をつけた10羽の鵜に魚を捕らせる伝統漁法。涼やかな川の上で鵜匠の妙技、舟弁当と景観を楽しめる。「夜うかい」だけでなく「昼うかい」も実施。

［期間：6/1〜10/15］

☎0568-61-0057木曽川観光㈱ 予約専用☎0568-61-2727／3,500円〜／川の増水時休業

□明治村

明治建築を中心とした歴史建造物を移築した野外博物館。三重県庁舎、聖ヨハネ教会堂などレトロな建物の見学だけでなく明治時代の衣裳を着てみたり、当時の味を再現したグルメを味わったりと古き良き時代にタイムトリップしたような体験ができる。

☎0568-67-0314／9:30-17:00（季節・曜日により変動）／大人2,000円／名鉄犬山線犬山駅からバス20分

□日本モンキーパーク

小さなお子さまから楽しめるアトラクションも豊富な遊園地。季節ごとのイベントも大人気。夏にはプールも楽しめる。

☎0568-61-0870／10:00-17:00（季節・曜日により変動）／大人1,300円／名鉄犬山線犬山駅東口からバスで5分

□リトルワールド

世界の各国の衣・食・住をテーマとした野外民族学博物館で23ヶ国32施設が現地から移設されて展示と内部公開されている。各国の民家の見学、民族衣装の体験、文化やグルメの体験が楽しめ入園すると一日で世界一周を体験できるのが魅力。

☎0568-62-5611／9:30-17:00（季節・曜日により変動）／大人1,900円／名鉄犬山線犬山駅からバス20分

□お菓子の城

砂糖で作られた人形や城のシュガーアートの展示をはじめ、クッキーやビスケットの手作り体験、お菓子バイキングなどが楽しめるお菓子のテーマパーク。童話に出てくるようなお城へ入れば世界一の高さのウェディングケーキがお出迎え。中は甘いメルヘンチックな世界が広がる。

☎0568-67-8181／10:00〜17:00／大人1,300円／水・木曜日（季節により異なる）休／名鉄小牧線楽田駅からタクシー3分

築城年：安土桃山時代／文禄2〜3年（1593〜1594）
築城者：石川数正・康長
所在地：長野県松本市
形　状：平城

松本城

Matsumoto Castle

北アルプスを背景に端正な構成美をみせる天守群

我が国現存最古である5重6階の大天守を中心に連なる5棟の櫓が国宝である。大天守、乾小天守、それらをつなぐ渡櫓が安土桃山時代に、月見櫓と辰巳附櫓が江戸時代に附設された。5棟の「連結複合式」と呼ばれる構成は他に類例を見ない。異なる時代に築造された天守群の構成美と黒塗りのモノトーンな色調が、国宝にふさわしい絶対的な存在感と気品を漂わせている。

築城ストーリー

深志城から松本城へ

戦国時代初頭、松本が深志と呼ばれていた頃、信濃（現在の長野県）も激戦地となった。永正元年（1504）、信濃※1守護の小笠原氏の一族島立氏が、※2館城としてあった「深志城」を、本拠地林城の前面を固める支城の一つとしたと伝える。

しかし天文19年（1550）に甲斐（現在の山梨県）の武田晴信が小笠原氏を攻め敗走させた。そして常に攻めによる軍事戦略を展開していた武田氏は、山城の林城ではなく湧水地帯の中の深志城を信濃での本拠地とした。

天正10年（1582）に織田信長らによって武田氏が滅ぼされ、同年、本能寺の変で信長が倒れるという激動の中、小笠原氏が徳川家康の援助で復帰する。名称を松本城と改めた後、城や城下町の造営に着手した。

※1 諸国の治安・警備に当たった鎌倉・室町幕府の職名
※2 邸宅と城を兼ねたもの

戦国期の築城

豊臣秀吉が天下人となり家康を東国に※3移封させたことで、小笠原氏もまた下総古河（現在の茨城県）に移されることになる。秀吉は東国を監視する城として石川数正に松本城の整備を命じる。しかし数正は天正20年（1592）の朝鮮出兵で名護屋に出陣した後、病で死去。工事は子の康長に引き継がれ、文禄3年（1594）頃に天守3棟が完成したと考えられる。

秀吉の大坂城は金箔瓦を引き立たせるために黒で統一されていた。信長が初めて安土城に用いた金箔瓦を使うことで信長の後継者であることを示したのである。秀吉から託された松本城も漆黒の下見板が使用され、黒い城となった。

北アルプスを背に東を向いた※4 5重6階の天守は権力を見せつけ、秀吉の政策を推進する重要な役割を担った。しかし秀吉没後、慶長5年（1600）関ヶ原の合戦で家康が勝利し、江戸幕府が誕生。改易された石川氏に替わって再び小笠原氏が入城、間もなくして戸田氏に替わった。

※3 大名などを他の領地へ移すこと。
※4 外観5階、内部6階

江戸期の築城

寛永10年（1633）に家康の孫にあたる松平直政が入城。翌年、三代将軍徳川家光が上洛の後、善光寺へ参詣するため松本城に宿泊すると聞き、急遽造ったのが辰巳附櫓と月見櫓であると言われている。結局、参詣は中止され家光が来ることはなかったというが、今日に見る5棟からなる天守群がこの時完成した。

以後、城主は堀田氏から水野氏、再び戸田氏へ幕府政策とともに目まぐるしく交代していった。

△月見櫓〈現存〉

▽辰巳附櫓と月見櫓〈現存〉

当時を偲ぶ建物

△黒門枡形〈復元〉

▽太鼓門枡形〈復元〉

▷大天守〈現存〉

保存に奔走した人々

城主は石川数正以後、6家23代にわたり明治維新を迎えた。松本城も門、塀、堀が次々と壊され、残る天守も売却され解体が決まった。これを知った自由民権運動の先駆者市川量造が県に博覧会場としての利用を提案、並々ならぬ努力で開催にこぎつけ、その収益金と寄付金などで天守を買い戻したと言われている。

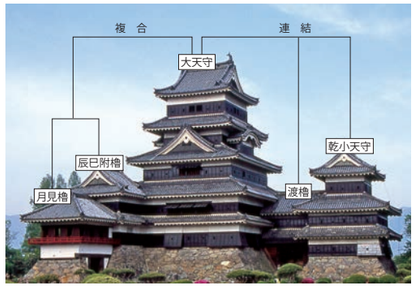
こうして解体を免れた天守であるが、歳月の流れとともに傷みが激しくなり、とうとう天守台内部の支持柱が腐って傾きも生じた。そこで松本中学校校長小林有也と地元の有志らが修復のために保存会を発足させ、資金集めに奔走し大正2年（1913）年、修復が無事終わった。

昭和11年（1936）に天守群が国宝に指定されるが、戦時中は実質的な保存活動が行われなかったため傷みが進んだ。しかし連合軍総司令部美術顧問による国への勧告や時の市長をはじめとする市民の熱意によって、昭和25年（1950）から日本で初めて天守解体復元の大工事が始まった。松本城はこうした人々の努力で守られ、大戦や天災を乗り越えて今、人々の前にそびえ立っている。

見所ガイド

剛と雅が調和する時代を映した天守

連結複合式は独立天守の多い近世城郭の中でも珍しく、戦に備えた天守3棟と泰平の時代に造られた月見櫓等に、それぞれの時代を象徴する城郭建築を見ることができる。各階の下部に黒漆塗りの下見板がはられた天守群は、四季を通じて威風堂々とした姿を見せる。

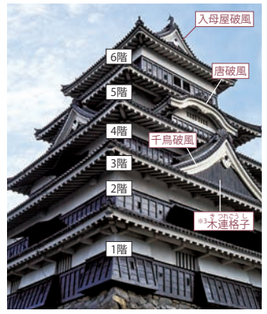


連結複合式天守

大天守の右に乾小天守が渡櫓で連結し、左に辰巳附櫓と月見櫓が複合している。城郭建築の分類でいう連結式と複合式が合体した天守の形式で、松本城だけに見られる構造。

① 大天守

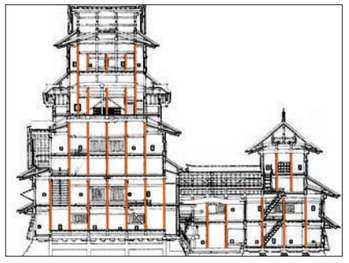
1階は食料や武器の倉庫、2階は戦となれば[※1]武者溜になったと考えられており、「松本城鉄砲蔵」にはさまざまな火縄銃が展示されている。3階は外観からは見えない階で、倉庫として利用されたと思われる。4階は丁寧な造りの部屋になっており、いざという時の[※2]御座所となった。5階は重臣が戦の作戦会議を開く場所と考えられる。6階は敵の様子を見る望楼として使われ、現在でも市街をはじめアルプスの山並みを眺望できる。



【外観】

屋根 1重から4重までは寄棟造りで最上階だけが入母屋造り。戦国末期の築城とあって装飾は少ないが、南面では縦に連なっている3種類の[※4]破風を見ることができる。

石垣 [※5]野面積みに四隅は[※6]算木積みのような積み方で補強している。



【内部】

使われているすべての柱222本のうち110本が二つの階毎に通した「通し柱」であり、丈夫な造りになっている。さらに柱の筋が1階から6階まで通っているため安定している。大規模な天守を支えるため天守台の中にも16本の柱が埋め込まれるなどさまざまな工夫がされている。

② 乾小天守

乾とは北西の方角をいうが実際には大天守の北に位置している。外観3重内部4階の櫓。4階には大天守にはない[※7]花頭窓が施されている。3・4階内部の12本の丸太柱は自然のままの木を用いた築城当時のものである。

③ 渡櫓

大天守と乾小天守をつなぐ2階建ての櫓。天守群の入り口である大手口が地下1階にあり、頑丈な扉を取り付けている鏡柱と呼ばれる柱には、けやきの木が使われている。

△乾小天守

鉄砲戦に備えた城

【壁】

上部は白漆喰仕上げ。下部は下見板張り。厚さは1・2階で28.9㎝もあり鉄砲の玉が途中で止まってしまう。

【窓】

鉄砲で狙われないようにしたため少ない。竪格子（武者窓）の窓から鉄砲が撃て、つっかい棒をはずすとすぐ閉まり壁となる突き上げ戸が付いている。

△突き上げ戸

△竪格子（大天守2階）

【狭間】

正方形のものが鉄砲用の「鉄砲狭間」、長方形のものが「矢狭間」。天守群で合計115カ所あり、郭内では2000余りもある。

【石落】

石垣を登ってくる敵に鉄砲を使って攻撃もできた。

【内堀】

幅は火縄銃の有効射程距離が約50～60mであったことを考慮して決められた。天守の方は浅く、反対側は深くなっており、最深で3.2m以上もある。

【横矢掛り】

内堀にせり出している石垣から、黒門に向かって進む敵兵を横から弓矢や火縄銃で攻撃する。

※1 武士たちが待機した場所　※2 城主がいるところ　※3 ここから光が窓のない3階に差し込む。銃眼にもなる。　※4 P20参照　※5 自然石をほとんど加工しないで積み上げる。石同士がしっかりかみ合った堅固な造りとなる。　※6 石垣の角部に用いる積み方。石垣は隅が特に崩れやすいので直方体に加工した切石を交互に積み上げて強度を持たせる。　※7 P14参照

④ 辰巳附櫓

大天守の南東（辰巳）にある2重2階の建物。1階に武者窓、2階に花頭窓が施されている。

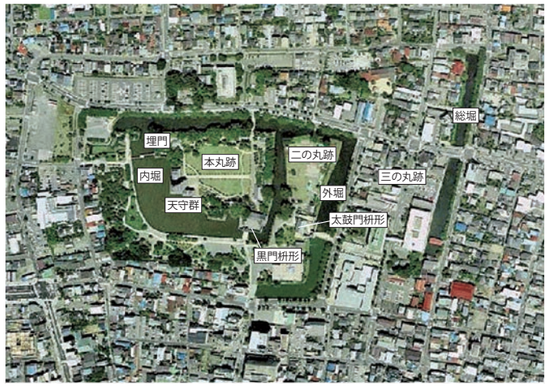
⑤ 月見櫓

月見をするための櫓で[※1]舞良戸をはずすと北・東・南の三方が吹き通しとなる開放的な造り。三方に巡らせた刎高欄をもつ朱塗りの回縁や船底の形をした天井が優雅な雰囲気を醸し出す。

現在、月見櫓があるのは他に岡山城、高松城があるが、天守と一体になっているのは松本城だけである。

縄張りの特徴

戦に有利な山城が築かれた戦国時代において松本城は異色の平城。山城に比べて防御性が低い平城を守るためのさまざまな防御設備が見られる。[※2]縄張りは本丸を中心に二の丸、三の丸が周りを囲む輪郭式＋梯郭式。天守から東方向の直線上に本丸の正門である黒門枡形が造られ、さらに二の丸への出入り口である太鼓門枡形が防備を固めている。総堀は一部を残すのみである。

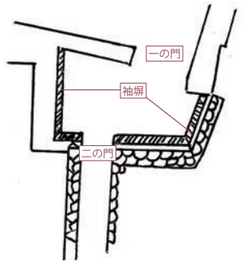


⑥ 黒門桝形

本丸へ入る正門であり、一の門・二の門・袖塀から成り立つ枡形になっている。一の門は昭和35年（1960）に復興、二の門と袖塀は平成2年（1990）に復元された。

【枡形】

枡形とは一の門と二の門との間にある方形の広場。出陣の時は兵の集まる場所となり、敵が侵入すれば妨げた。



【袖塀】

袖塀には狭間が作られ、控柱に板を渡せば塀の上からも攻撃ができた。

△袖塀

⑦ 太鼓門桝形

二の丸への正門で黒門と同じ枡形になっており、平成11年（1999）に復元された。太鼓門門台には登城、時、緊急を知らせる太鼓楼があった。

【一の門（櫓門）】

樹齢400年の木曽檜と樹齢140年余りの松材を使って復元された。

【二の門（高麗門）】

手前の土橋は門の近くで急に狭くなっている「鵜の首」という防御になっている。

【玄蕃石】

△玄蕃石

一の門脇にある高さ3.63m重さ22.5tの巨石。秀吉が大坂城に巨石を置いて権力を象徴したように、石川氏にも同じような意図があったと考えられる。呼び名は石川康長が玄蕃頭という官職であったことに由来する。

⑧ 埋門

本丸からの出口として非常用に設けられたトンネル状の門。壕には足駄塀が設けられていた。当時、非常時以外は開かなかった。昭和30年に観光用に造られた朱色の埋橋は撮影スポットのひとつ。（現在、門は閉鎖されていて通行不可）

⑨ 二の丸御殿跡

本丸と二の丸には3つの御殿があったが、後の戸田氏が城主になった翌年の享保12年（1727）に本丸御殿が全焼してからは二の丸御殿が政治と城主の生活の場となった。

□ **松本城**
☎ 0263-32-2902 松本城管理課／700円／8:30〜17:00（最終入場16:30）／12月29日〜31日休／JR松本駅から徒歩15分
http://www.matsumoto-castle.jp/

※1 書院造りの建具の一つで板戸に舞良子とよぶ桟を横に細かい間隔で入れた引き違い戸。　※2 郭や堀、門などの配置をいい、「連郭式」・「円郭式」・「梯郭式」・「並郭式」等に分類できる。

城下町散策ガイド

城下町は武田氏が滅んだ後に復活した小笠原氏が建設に着手し、水野氏の時代に完成したといわれている。本丸と二の丸には天守や城主が居住した御殿を、三の丸には上級武士の屋敷が建てられ、総堀を含めた内側を城内、その外周辺を城下町とした。市の中心部を流れる女鳥羽川は侍町と町人町の境界線となり堀の役割も果たした。神社や寺院が町人町を囲むように外側に配置されて防衛の前線となった。

□松本市立博物館

市全体を屋根のないひとつの博物館とする「松本まるごと博物館」の中核施設として松本の歴史・文化を紹介している。常設展示室の「松本城と城下町の時代」では6家23代におよぶ松本藩の政治、藩主の生活、城下町の暮らしぶりを伝えている。

☎0263-32-0133／9:00〜17:00／年末年始休、火曜休（祝日の場合は翌日）／JR松本駅から徒歩15分

□なわて通り

城の南総堀と女鳥羽川にはさまれた「縄のように細長い土手」に由来し、通りの名が付きました。城下の風景を再現したように、たい焼き、雑貨などの店舗が並びます。見ているだけでも楽しい歩行者天国通りです。　JR松本駅から徒歩10分

□源智の井戸

公共の井戸・湧水

善光寺道名所図会［嘉永2年（1849）刊］に当国第一の名水として紹介されている湧き水。多量で水質も良いためこの辺りでは酒造業が栄えた。名は中世にこの地に移住した河辺縫殿之助玄智にちなむと伝えられている。　JR松本駅から徒歩10分

□蔵の町・中町通り

城下町が建設された当時の町割りが良く残り、軒を連ねた蔵造りの店舗が面影を残している。なまこ壁が続くノスタルジックな風情に「中町・蔵シック館」を拠点として陶芸・民芸・クラフト店・和菓子店などが並ぶ。

中町は善光寺街道沿いで昔から商人の町として賑わってきたが、再三にわたる火災に遭ったことから、なまこ壁の土蔵が造られた。

JR松本駅から徒歩10分

□松本市時計博物館

大きな振子型時計がシンボルの時計の殿堂。古時計の研究者であり技術者でもあった本田親蔵氏から寄贈されたコレクションを中心に国内外の貴重な時計を収蔵・展示している。約110点の時計をできるだけ動いている状態で展示していることが特徴。

☎0263-36-0969／9:00〜17:00／月曜（祝日の場合は翌日）・年末年始休／JR松本駅から徒歩10分

□国宝旧開智学校校舎

明治9年（1876）に建てられた日本最古の擬洋風建築の一つ。侍町と町人町の中間にあたる女鳥羽川沿いにあり、もと武士の子どもと町人の子どもが一緒に学んだ。明治時代の教科書など教育資料や舶来のガラスなどの建築資料が展示されている。

※耐震工事のため令和6年秋頃まで休館中

□松本市美術館

世界的に活躍する芸術家・草間彌生の屋外彫刻作品が入り口で出迎える。常設展示室では山岳をテーマとした作品や郷土の作家の名作を計画的に展示。

記念展示室では日本を代表する作家で松本市の名誉市民である書家・上條信山、洋画家・田村一男の寄贈作品を展示している。

☎0263-39-7400／9:00〜17:00／月曜（休日の場合は翌日）・年末年始休／JR松本駅から徒歩12分

□重要文化財旧制松本高等学校（あがたの森文化会館）

1919年（大正8）に創立された旧制高等学校。1950年（昭和25）の学制改革で旧制高校の制度が廃止になるまで5000名余の人材を輩出した。

文学界では唐木順三、中島健蔵らが卒業生。全国的に旧制高等学校の遺構が少なくなってきているなかで当時の木造洋風建築が生き続けている。

☎0263-32-1812（あがたの森文化会館）／9:00〜22:00（日曜は17:00まで）／月曜（祝日の場合は翌日）・祝日休／JR松本駅からバス「タウンスニーカー」で13分

松本周遊バス「タウンスニーカー」

松本駅を起点に観光名所を北・南・東の3コースを巡回する。路線区間内は1回200円で乗車でき、3コース乗り降り自由の1日乗車券には施設割引券が付いている。

主な停留所
周遊コース

参考文献：後世に伝えたい…松本城下町10景（「国宝・松本城を世界遺産に」推進実行委員会）／歴史のなかの松本城（松本市教育委員会）／わたしたちの松本城（松本市教育委員会）